

防災訓練で見た「いのち」を守る会社姿勢 矛盾した施策は正すべき！

1日、JR水戸支社は内原電留線にて総合防災訓練を実施した。乗客や車掌・運転士といった役割に分かれた同社やグループ会社社員ら約50人が、避難時の一連の流れを確認した。

訓練は「震度6強の地震が発生し、大甕一東海間走行中の上り普通列車が停車、津波警報が発令された」という想定で行われた。訓練が始まると、指令室から津波警報が発表されたと知らせる連絡が入り車掌らが乗客役に対し慌てないよう声をかけた。その後、避難の際に介助が必要な人やけが人などがいるか確認しながら乗客役約40人を集め、手助けが必要な人を優先して降車させた。

乗降口から線路まで1, 2メートルの高さがあるため、通常は避難用のはしごを設置して降車する。今回は同社が定める「津波注意区間」に車両が停車したという想定で、より迅速な避難が求められた。車掌は乗客役と協力して、うまく降車できない人の体を支えるなどさまざまに工夫し、はしごを使わない方法で素早い避難を行った。

降車後、車掌はタブレットで専用の地図アプリを参考にしながら、乗客らを避難上に誘導した。

訓練の責任者を務めた水戸駅長は「これからもお客さまや社員の命を守るため、災害対策に取り組んでいきたい」と話した。

9月2日付茨城新聞より抜粋

会社は、今回の防災訓練で想定された「大甕一東海間の津波注意区間」を含む水戸一いわき間は来年度「中編成ワンマン運転」施策を拡大させようとしています。

多くの津波注意区間を含む区間でも「中編成ワンマン運転」が行われると異常時には運転士がすべて行わなければなりません。迅速な対応が求められる中、避難経路の選定や状況把握、避難はしごを使わずに避難をするということは一部報道されたような「車両より転落」しけがを負ってしまう旅客も発生してしまうなど様々なリスクがあるなか避難対応スキルを持つ乗務員が減ってしまうこと自体が問題であり、ワンマン運転では今回の防災訓練と同等の安全性を保持することは困難であり、被災リスクが高まってしまいます。

会社として「いのち」を守る災害対策に取り組むのであるならば、効率化のみに注力した「中編成ワンマン運転施策」は見直すべきではないでしょうか。

お客さま・社員の「いのち」を守るためなら 危険な「中編成ワンマン運転施策」を止めるべきだ！